

E・F 作者／時代／ジャンル	清少納言／平安時代中期／随筆
作者の①父親／②誰に仕えていたか	①清原元輔（平安時代中期の歌人） ②定子（一条天皇の中宮（天皇の妃））（読み方：ていし）
D 日本三大随筆（作品名／時代／ジャンル）	①枕草子／清少納言／平安時代中期 ②方丈記／鴨長明／鎌倉時代 ③徒然草／兼好法師／鎌倉時代
D 枕草子の内容	作者が宮仕えしていた頃、見聞きしたり、季節の感想、人生観を書き記したもの。
D 枕草子でよく使われる言葉	をかし（趣がある、風情がある）
枕草子はその特徴から何と表現されているか	をかしの文学
E・F 作者が各季節で良いと感じる時間帯（4）	①春：あけぼの（明け方） ②夏：夜 ③秋：夕暮れ ④冬：つとめて（早朝）
各段落の1文目のあとに省略されている言葉はなにか	をかし （他の箇所でも多数省略されている）
古文中での「の」の注意点	そのままの「の」に訳すものと、「が」に訳すものがある 例：蛍の多く飛びちがひたる⇒蛍が <u>多</u> く飛び交っている
D 秋の段落を2つに分けたときの後半はの始めは？	日入り果てて
D 上記、分かれる理由	前半は視覚で捉えているのに対し、後半は聴覚で捉えているから
風の音／虫の音 の読み方	かぜの <u>おと</u> ／むしの <u>ね</u>
D <u>現代仮名遣いに直して、すべてひらがなで書け</u>	
基本的なルール（他にもたくさんある）	
語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」	わ・い・う・え・お
au・iu・uu・eu・ou	o・yu・u・yo・o
ゐ・ゑ	い・え
ぢ・づ	じ・ず
助詞以外の「を」	お
語頭以外の「つ・や・ゆ・よ」	小さい「つ・や・ゆ・よ」になることがある
くわ・ぐわ	か・が
やうやう	ようよう
山ぎは	山ぎわ
なほ	なお
飛びちがひたる	飛びちがいたる

をかし
近う
さへ
あはれなり
火桶

おかし
ちこう
さえ
あわれなり
ひおけ

D 現代語訳せよ

あけぼの

E・F やうやう

山ぎは

山の端

さらなり

E・F をかし

あはれなり

いと

言ふべきにあらず

言ふべきにもあらず

つとめて

さらでも

「さらでも」の内容

つきづきし

「つきづきし」の内容

ぬるくゆるびもていけば

「ぬるくゆるびもていけば」内容

わろし

明け方

だんだんと

空の、山に接する部分

山の、空に接する部分

言うまでもない

趣がある

しみじみとした趣がある

とても

言いようもない（言い表すことができない）

言うまでもない（言わなくても分かっている）

早朝

そうでなくても

雪が降っていなかったり、

真っ白な霜が降りていなくても

似つかわしい

冬の寒い早朝に、人々がキビキビと炭を

持ち運んでいる様子が似つかわしい

だんだん緩んでいくと

寒さがだんだん緩んでいくと

好ましくない・見劣りがする

B 全文を現代仮名遣いにせよ。

S/A 全文を現代語訳せよ。

自分のランクと、それより下のランクのもの全部